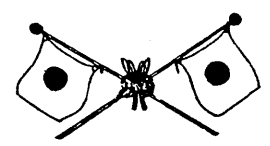


平成4年1月31日
 発行
 〒798
 宇和島市和霊町1451
 和霊神社内
 愛媛県神道青年会
 広報委員会
 TEL(0895)22-0197

26号

愛媛県神道青年会発足二十周年 記念新春特別号

祝祭日には
国旗をかかげましょう



特別講演

「黒住教の現状と課題」

黒住教学院学院長 黒住信彰 先生

平成三年八月二四、二五日
 於、松山ワシントンホテル

司会

黒住信彰先生に、『黒住教の現状と課題』と題して講演頂きます。

その前に、黒住先生の御略歴を紹介いたします。

先生は、昭和二四年八月二二日に岡山市に御生まれられました。昭和四八年三月、岡山大学法学部哲学科を御卒業になりました。学生時代は柔道部に籍を置かれて御活躍なさいました。同年黒住教本部に勤務され昭和五五年黒住教の教師養成の為の機関、黒住教学院の学院長に就任され、現在に到っております。

一男一女のお子様のお父様でいらっしやいます。

それでは黒住先生、御講演宜しくお願います。

講演

こんには。只今御紹介頂きました黒住でございます。

今日は四国四県神青氏青合同研修会並びに、愛媛県神青再発足二〇周年記念大会の挙行誠におめでとうございます。また、このような席にお招き頂き、その席で『黒住教の教化活動と課題』と言う事でお話しをする様にこの事ですので、お

動めさせて頂きます。

私共黒住教は、神社神道に對しまして、教派神道と呼ばれるグループでありまして、教祖は五〇〇年余り続いた神職の家に生まれたものです。岡山市内に、現在も御鎮座になります。今村宮という岡山の守護神社に御奉職なさっております。その時に御悟りを開かれて、黒住教を立教した訳でございます。今年で立教一七七年になりました、現在の教主で六代目になります。教主の前もそうだったらしいのですが、代々教主を継ぐ人は、名前に、宗教の宗(シュウ・ムネ)の字が付くようになっておりますし、教主の次男三男、もしくは、分家の長男には、忠(タダ)の字が付く様になっています。私には信(ノブ)の文字がついていますから、分家の分家くらいでしょうか。

代々私の黒住家でも、神職として御務めしてきた家ですので、またいろいろな宗教者の会合とかにも行きますが、神道

の方に対しては親戚の様な、親しい想いを抱かして頂いております。ですから、よく私は祖母に言われました。小さい頃から言われました。とにかく、氏神様を大切にしなければいけないんだ。氏神様を大事にすることが、一番必要なんだ。と言う事を良く言われておりました。ですから私は氏神様には、よく御参りますし、子供の時はその氏神様で遊んだり、奉納相撲大会に出場したり、いろいろして居りました。ですから、氏神様というのは切っても切れないものであります。

私がこういう御仕事をさせて頂く事になります、そしてまた現在、今御紹介頂きましたように、黒住教の布教師(教師)を養成する機関にあります。皆さんと共に私が指導して、というよりも、共に一緒に神様にお仕えし、共に学んでいく。と呼び掛けて一緒に進んでおる訳です。先程の御挨拶にもありましたが、

今、神社界は厳しい時代を迎えておる。とそのような事を仰っておられました。実は私も、布教活動というのは難しいものである。と言う事を感じながらいろいろすすめておりました。

先般、宗教者の会議、(黒住教は、現在世界連邦日本宗教委員会、世界連邦岡山県宗教委員会、世界宗教者平和会議などに参加しています。)で出席させて頂き、御奉仕させて頂きましたのですがその時の青年グループで、研修旅行をした事があります。その時にこういう話を聞いたのですが、ある新宗教の人の、いみじくも言われた言葉が印象に残っているのですが、何はともあれ、一番強いのは神社神道だと言うんです。よく、ちゃんと教育が出来ている。と、言われておるのです。私は、何を言うておられるのかと話を聞いていたのですが、神社の、氏神様のお祭事であるとか、何かがあると、言ってお付事をお願いしたら、必ず気持ち良く寄付してくれるのは氏神様のお祭だというのだそうです。そうは言っても、貴方方新宗教の人くらい一生懸命布教に行つては殆ど毎日勉強会を開いたり、布教活動しておられるのに貴方方の方が良く布教しておられるのではないですか。

と、言いましたら私達が、一日声をかけなかつたら余所の方へ引張つて行かれる可能性が在るから、毎日訪ねていつてその人がうちに来てくれるかどうか、確認している様な毎日なんだそうです。言うならば自転車操業の様なものなんだそうです。それに引き換え神社神道の場合、殆ど布教活動をされていない様でも、ちゃんと心の中では、神様と氏子さんの仲がきつちりと結ばれておりますから、強いのんだ。と、中々その仲へわつて入ろうとする訳にもいかない。とおっしゃられるのです。私はその話を聞きながら、「なるほどなぁ」と、感じると同時に、今迄もあつたかと思えますけど、段々町は都会化し、村は過疎化し、いろんな問題が出て、神様と氏子が結ばれていたのが、それが何時迄も続けばいいのですけど、私達が考えなければいけないのは、今がある意味では大切な時期じゃないか。そういう事は感じます。で、私達も今年立教一七七年になる訳ですけど、岡山や中四国を中心に布教されて、その勢いがずっと上に昇つて行くのかと思つたけれど、明治の頃何かストップした様になりました。ストップするつもりも無かつた訳でしょうが、中四国での勢い程、上の

方へ昇つて行きませんでした。色々問題も在るうかと思えますし、其を色々検討もして行かなければならないとは思いますが、田舎の方にいきますと、過疎化になつてきます。信者さんが東京都か都会の方へ行つてしまいます。都会の方と言いましても、岡山の方もだんだん新しい人が入つて来ます。一昔前でしたら、黒住教と言えど誰でも知っていた。と言われるくらいだったのですけれど、今頃は黒住教と言ってもピンとこない世代も、正直言つて増えて来ている訳です。ですから、ある意味じゃあ今が大切な時期だと思いつつ、どの様に布教、教化活動をして行くかが、皆さんの課題であると同時に、我々黒住教の課題であろうかと思つておる。

と、三つのお祭りの為の御参りに来る様にか、お供えをする様に。というような事を世話人さんが言いながら、信者さんの家を廻つて行くんだらうと思うのですが、その日常活動がしていないと、気持ち良くそのお祭りに御参りさせて頂き、お供えをさせて頂きます。という様な方が段々少なくなつて、そういう意味での問題がある意味では、出てきているんじゃないか。という気が致します。ですから私共も、その教化活動。と言いますか、今日的にどの様にして行くか。というところは、色々議論され、いま努めている所でございます。私共のこの宗教活動をお務め致しております、「神社神道と黒住教とはどう違うのか。」と聞かれたりします。まあ言つたら、「神社神道。神社の神職であつた黒住宗忠という人が、悟りを開いて一つのグループが出来たんだ。」そういうふう話しているんですけど。しかし、実際問題と致しまして神社は、皆さんも御存知の様に教祖も教典も無い訳でございます。しかし私は、本当は神社の姿というのが、究極の神道の、いいや、宗教の姿で在らうと思つておる。と、言いますが、私共の教祖に倣ひまして、お伊勢さんへ御参り致しま

す。最近では毎年正月に御参り致します。本当に神々しい霊気というものを御勢さまで感じます。そして、宇治橋を渡って玉砂利を踏んで歩いて行き、そして大前に進んだ時、何とも言えない気持ちを感じます。これは日本人だけか、と申しますと、「外国の方が大変感激されるんだ、と。中には、御参りされた帰りに宇治橋の所迄来て、宇治橋の所で改めて、頭を下げて行かれるんだ。」と言います。感激したトゥインビーの言葉も聞きました。とにかくそうした普通の外人さんの方が伊勢の神宮に御参りして、頭を下げられる。と言っています。それが、本当の姿だと思えます。私達は、教祖の教えを以て何を説くか、と言いますと、

大御神様のお徳を説く訳です。生かされて生きる我々の、人間と言うものはどういふものか、どういう日々を送れば神様に叶う生き方が出来るか。それを我々は黒住教の教えとして説くわけです。本来は神社に御参りすれば、頭を下げれば、何とも言えない気持ちになり、人間というものは、神の様な心で、神様とことわけしなくても、そういう雰囲気があったんだらう。と思っています。ですから私達は、お説教をし、教祖の教えを説き、大

御神様のお徳を説いて、感激して喜んで喜び溢れる人生に目覚めてくれる。それはそれで嬉しい事なんですけれど、とりも直さず、境内に足を一步踏み入れただけで、何とも言えない、母親に抱かれた様な、母親の懐に抱かれた様な、神様に見守られておる。そういう気持ちに成って頂く事が最高であろうか、と思っています。ですから私は、西行法師の歌と言われる

『なにごとの

おわしますかは しらねども

かたじけなさに なみだこぼるる』

この歌を、いろんな説が在る。と言うのも聞きました。しかし本当に、私達自身が神様に御奉仕をし、又、神社に御参りする時、かたじけなさに涙が零れる思い。この歌を伊勢の神宮の社頭で詠んだ。と言われるから問題が在る。と、言われるのかも判りませんが、伊勢の神宮であろうと、何処の社頭であろうと、何処の鎮守様の御前であろうとも、そういうかたじけなさに涙の零れる思いで御奉仕をする。という事が今、一番私達に欠けているのではないだらうか。と、思っています。教え云々よりも先ずその事を、教団

の教師、布教師たる者に、話をしている所であります。

私達黒住教の本部は岡山に在ります。吉備津彦神社の南側にあり、吉備津神社の南西に在ります。備中一宮の吉備津神社とは境を接しておる訳ですが、吉備津彦命の御陵墓をお祭りしているその御陵から東にあたる所に、今から一七年前、地元の人の御協力を頂きまして、黒住教の本部を移しました。昔から其処は『しんとうざん(神の道の山)』と呼ばれていたそうです。その、黒住教の本部神道山で、昨年(一月)に「グローバル・フォーラム」という会が開かれました。『環境問題を中心、地球の生き残りに付いてかながえよう。』というグループがあり、国連に事務局があります。国連の外郭団体の様な形がありますが、日本人の松村さん。といわれる方が中心となりまして、これからの地球、二一世紀を生き残る為に、私達は何をすべきか。理想主義者の宗教者と、現実主義者の政治家・科学者が一つのテーブルについてこそ、本当の意味での、地球の生き残りについての話し合いが出来るのではないかと、考えているグループです。この会の第一回が、英国のオックスフォードで開かれま

した。たまたま御案内頂きまして、黒住教の教主の長男がロンドンに留学しておりましたから、教主の代わりに長男が出席しました。その次が、昨年(一月)ですが、ゴルバチョフ大統領の肝入りで、モスクワで開かれました。それこそ宗教者・政治家・科学者のそうそうたるメンバーが集まったの会が開かれました。次の第三回が平成五年に京都で開かれるそうです。京都では、二千人の宗教者、政治家、科学者、ジャーナリストを集めて開かれるそうです。このグローバル・フォーラムの集まりは、世界的には大変興味を持たれている集まりだそうですが、どうも日本の場合、宗教が絡んでいる場合は、あまり大きく取り上げられないみたいですが……。その、二千人集まって行われるフォーラムの準備委員会と称しまして、会を神道山で開きました。その時には、もちろん黒住教の事を知って頂く。というより、神社本庁の先生方にも御協力頂きまして、神道の物の見方、考え方をそうした事、又日本の科学者の方々にも御協力頂きまして、神道山で勉強をし、今度は体で感じて頂く為に、という事、お伊勢様に揃ってお参りして頂きました。神宮の皆様方が、心からお迎え頂きました

て、色々御世話頂きました。前振りが長くなりましてけれども、その研究会に仏教者を代表して、『仏教者の見た日本の神道』という形で、薬師寺の高田好胤先生にお話頂きました。高田先生は『大嘗祭』について、色々お話し下さいました。仏教者が見た神道というのは、他の宗教者の方々にとっては、色々な意味でのインパクトがあった様に思います。この高田先生ですが、岡山に来られて初めて神道山に御参り下さった訳ですけど、その時に、会場の上に教祖の直筆の御神号(神様のお名前)と、教祖の御影像(教祖の絵姿)が祭られています。そうしますと高田先生が其処へ行かれますと丁度其処は土足でも構わない様に絨毯が敷いてありまして、その上へお祭してあり、我々は立って敬礼する訳なんですけれど。びっくりしました。高田先生は袈裟を着られた儘その所へ土下座をされまして、我々が靴で踏む所に頭を擦り付けてお祈りして下さいました周りに居る者がびっくりしたんです。神様にお祈りする時、仏様にお祈りする時、果たして、私達はこうした気持ちで接しているのだろうか。私も初めて高田先生のお話を聞いた訳ですし、初めてお会いした訳ですけれども、

流石、あの薬師寺を建て直した、今日在らしめた高田先生だ。凄いいもんだな。と、びっくりさせられました。私達は同じ様に、そういう事を聞いておる訳なのです。例えば教祖の逸話にこういう話があるんです。教祖も同じ様に神職でございましたので、神職仲間の集まりがあったそうなんです。その晩、一緒に同宿した神職仲間の湯浅薩摩という人と、布団を並べてよもやま話をしておったそうなんですけれど。その湯浅さんから、「ところで黒住さん。貴方が御奉仕をする今村宮の御祭神は、何様ですか。」と、こう言われたのだそうです。教祖は答えなかったそうです。未だ寝ていないと思いましたが、話の途中ですから、「今村宮の御祭神は」と、重ねて聞かれたそうなんです。教祖は答えませんでした。「ああ、もう休まれたんですか。」と言、「もう休ましましょうか。」との声に返事して、「はあ、休ましましょう。」と仰います。「起きとられるんじゃないですか、それなら、貴方がお勤めする今村宮の御祭神は何様ですか。」と。三度聞かれた時に、教祖は寝ておった訳ですけど起き上がりまして、衣服を改めまして。外へ出てうがいをし、口を濯いで手を

洗って、その湯浅氏の枕元へ端座しまして恭しく「私が御奉仕する今村宮の神様は、天照大御神様・春日の大神様・八幡の大神様です。」と、答えた。と、伝えられているんです。私はこの話を最初に読んだ時に、凄いいもんだ。と、びっくりしました。教祖は、神様の名前を唱えるだけでも、寝転んで「うちの神様は云々……」などという事は決してなかった。と、言うんです。で、それは何かと言いますと、教祖にとって神様は、生きてお働き下さってる、教祖は神を知って、まあ言うならば、今頃は「神を知って……」などと言いますと、すぐ霊的なものか、そういう次元で捉えられがちなのですけれど、私達の信仰に於いて、本当の意味での神の恵み、神の御神慮、神の御心、神をみる。と言う事は一番大切な事ではないか。と思うんです。言うならば、神様が、ここに本当に生きて御働き下さって、御鎮まり下さってる。と言う事が判り、そして、神様に御守りされている。と言う事が納得出来れば、これに勝悟りは無い。と思うんです。それを知る為に、私達は日々務め、祈り。我々の心を敎い、清め、禊をし、とにかく神様の心に近付こうとして、祈りを努める訳であります。

それが判らないものですから、いろんな問題がおきる。と思うんです。そういう様な事で観ますと、考えますと、私は聞いただけでですけど、伊勢の神宮では、どんな事があったても、朝御饗を欠かさず御供えする。そう聞きましたし、今日、講師としておいでの出雲大社教は、どんな事があったても神様ことのお供えごとは、最高に、力一杯お勤めするそうです。やはり、神様に形を以て接するんだ。という気持ちがある間は、私は、大丈夫だろう。と思うんです。ところが、まあ神様より、生き神様の方が大切だ。と言いつつながら、人間様中心に考え出したところに、いろんな面で、問題が出て来ているんじゃないか。と言う事を、我々の教団を通してても、感じる事があります。黒住教は、全国に三三〇余りございまして。その教会所へ参りますと、まあ土地土地の性格もありましょうし、同じ神様をお祭し、同じ教えを説きながら、説く人にもよるんでしょうけど、発展する所もあれば、あと一歩。と、いう所もあります。教会所の規模の大きい小さいを抜きにしても、生きた働き。(生きた働き。と言うのは、俗に言う、お蔭がよく顯れる。ということです。)信者さんが喜び

勇んで信仰し、喜び勇んで御参りする教会所はそれがありますし、そうでないのも感じられる所があります。そういった目で見て、何が問題か。と言いますと、やはりお祭なんかに御参り致しますと、勢いのある。と言いますか、生きた働きをしている教会所は、神様に対するお供え物が、堆なして、います。新鮮な物です。本当に真心を込めてお供えし、神様にお仕えしているなあ。と、いう気持ちがある教会所は、中心になる所長であり、其処の総代さん方の御心が、其処に顕れているんだらう。と思われま。やはり、生きた働きが出来ているんだ。と思いません。どうも生きた働きが出来ないなあ。と言うものは、まあ、在り合わせの物をしておけ、お供え物には、お金は、よう、かけん様にしておけ。お祭の経費で云々したら、あまり、赤字が出る様な事をしたら困るから、とにかく抑えておけ、抑えておけ。というのが感じられたら、中々、と、いう事です。そういう所には一生懸命、こういう話をする訳ですけど、それは、言えるんじゃないか。と思っんです。

あったり、ひびがあつたりしますね。それなら、すぐ換えるべきだ。と思うんですが、すぐ、手に入りませんし、このお皿も結構しますから、許して下さいだらう。という甘えから、平気で、最初は申し訳ない。と、いう気持ちがあつたんでしようけれど、そうしているうちに、段々、ひびが入った物を平気で使う様な事が、無きにしても非ずなんです。そういう様な所が、やっぱり、問題では無からうか。と思うんです。私達の先輩の言葉に、こういうのがあるんです。『御神様、又は、御先祖様を祭っておる御霊舎にある神の枯れは、祭る人の心の枯れである。』『御神様、御霊舎の埃は、祭る人の心の埃である。』と言っんです。だから神は、いつも勢い良く、何時も水を換えて、勢い良く伸びた神を。御神前には、埃が無い様に。これが基本である。と言われるんです。それは、皆良く知っておてくれる。と思うんですけど、ついつい、そういう事がながしにされる。と思うんです。ですから私達は、神様に、どうい風にお仕えすればよいか、どうすればいいか。神様の御徳は、どうい様なものか。と、喧しく口で言って、やっと納得して頂きますよりも、御神前に座っ

て頂くだけで、もっと極端な事を言っつて、そのお宮さんに足を一步踏み入れたただけで、「あーっ、有り難いなあ。もったいないいなあ」という気持ちになつて頂く様に努める事が、私達の基本じゃないか。と思うんです。私は教会所にも、特に機会あるたびに、教団内では話をしておる訳なんです。ですから、教祖のそういう信仰。また伊勢の神宮を初め、昔から伝わつておる。そういう立派なお宮さんは、神様事に対するお供え事、お掃除。という事が徹底されている。と思うんです。そこを私達は抜きにして、如何に等の中に迎合するか、世の人々の関心を集めるか。と言うのは、如何に人の心を掴もうとしても、人が人を使おうとしても、やはり、神様のお働き、神様の御神慮無くしては、それは出来ない。と思うんです。ですから、神様にお護り頂ける様に努める事を、先ず基本とし、神様に対する最高の事を、御奉仕を、改めていかなければならないではないか。と、ついでこの間も、黒住教の教師の研修会がございましたが、その席でも、そのお話をさせて頂いた所なんです。ですから私達は、その時に初めて、そういう様な事を努めているうちに、祈りを捧げてい

るうちに、俗に言うところの、神様にまみえる。と言いますか、神様のお徳を知らして頂ける尊い体験を、させて頂けるのではないのでしょうか。

実は私も、いろんな方々とお付き合ひ頂き、御指導頂いておる訳でありますけれども、富山に変わった方がございまして。昔、大阪大学で、機械工学を勉強された方がございまして、ある時、突然神懸り的になつて、神様が語りかけて下さる。と言っんです。私もびっくりする様な人が、時々おられるんですけど。まあ私も、その人達に、唾言いますか、いろんな話を聞いているんですけども。その方は、岡山に、林原というユニークな会社もあるんですけど、其処に来て、研究一途に頑張つておられるんですけど。神様の声が聞こえる。と言っ事を、誇りの様に言うておられたんですけど。所が最近では、『神様の声が聞ける。言うのは、特殊な人間か、本当の、もっとも』と神様の事を知る為に言うて下さるのであつて、まともな人の道を歩んでおられる人には、必要ないんだ。』と、言われるんですが。その人は、『本当に神様の何か。を感じる。』言っんです。まあ、霊的に優れてある面が、あると思うんで

すが、どうして、その人が出来るか言うたら、とにかく純粹過ぎるくらい、純粹なのです。俗に言う、心の清らかな人なんです。欲も無い、本当に、にこにこされた方なんです。で、その人が、一番びっくりした質問は何だったか。と、言われたら、「先生、神様いうのは本当にあるんですか。」と、言うんだったそうなんです。それは、他の席で聞かれたら、全く驚かんかった。と言われるんです。神職さんの集まりで『神様はおられるんですか。』と聞かれた時には、どう答えていいか解らんんだ。」と、言うんです。とは言え、実際問題として、私達の問題として、神様に出会う事がしたい。と、皆思っとるんです。どんな形でも、神様の御神慮を知りたい。と思っておるんです。それを如何にしてしたらいいか。と、いったら、今言った様な事を毎日努める事であろうか。と、又、祈りを毎日努める事であろうか。と私は確信しておる訳です。又、日々のお導きの中に、教化活動の事を（おみちびき）と言いますが、悩む人、病氣の人、いろんな問題を抱えた人にその話をし、神の御徳を信じて、神の御心に叶う様な生き方をすれば、素晴らしい力を頂けるんだ。と、そう信じ

てそう努める人に、俗に言う御蔭を頂かれます。祈りを通じて、又そういう御導きを通じて、神の御神徳を知らせて頂く時に、「ああ、やっぱり自分たちは護られてるんだなあ。」という事を知るならば強いんです。宗教は体験だ。と思うんです。ですから、そういう体験が出来る場を。私達は神を仕える訳ですから、そういう場を持っている訳ですから、私達こそが、そういう事を信じて、本当に生きて下さって、目の前におられるじゃないか。と。見えん物を見える様に言うんじゃないんですけど、そういうつもりで努めるところに、皆さん方が信頼して下さる道があるんじゃないか。と思います。

黒住教の事について少しお話しさせて頂きたいと思いますが、黒住教は今言いました様に、一七七年前に、神職であった黒住宗忠によって開かれた宗教でございます。我々が教祖と仰ぐ黒住宗忠は、西暦で言いますと、一七八〇年、安永九年の冬至の日に、岡山に神職の息子として、生まれました。四人兄弟の一番下でありました。父親が、既に四十歳。母親が三十七歳の時です。今で言う四十歳、三十七歳と言ったら若いですけど、人生

僅か五十年と言われる頃の四十ですから、当時の事ですから、元服を済ませて間もなくし、早い人なら、十代で結婚して、子供を産む時代ですから、孫と言える様な両親の元に生まれました。幼い頃から、大変な親孝行だったと伝えられます。で、どんな様に親孝行だったか、いろんな逸話が伝えられますが、特に有名なものに、『下駄と草履』の逸話がございます。『下駄と草履』と言うのは、幼い教祖が、かぞえの三〇五歳の頃だったろう。と、伝えられますが、ある雨上がりの日に、遊びに行こうとした時に、父親が、「外は濡れているから、下駄で行く様に」と、「はい」と、素直に聞きました。勝手口から出て行こうとしたら、母親が、丁度外から帰ってきました。「外はもう乾いておるから、草履にしなさい。下駄は危ないから」「はい」母親はすぐ億へ行きました。父親が、下駄を履いて行け。母親は、草履を履いて行け。と、言いました。違った訳なんです。教祖はとっさに、右足に下駄。左足に草履を履いて、出ていった。と、言うんです。で、私は小さい頃から、耳にタコが出来るくらい、この話を聞かされておりました。ところが、大学の頃、研究室の助教が、眼鏡をす

らして煙草に火を付けながら、「黒住教の教祖は、小さい頃から大変ユーモアのある人だったんだなあ」と、言うんです。まあ、ユーモア、と言われても、まあ、ユーモアならいいんですけど、石川達三氏が、新聞小説で、確か『人間の壁』だった。と思うんですが、佐賀県の日教組の運動を扱った、昭和三十年中頃の問題小説が、朝日新聞に連載されたのですが、小学校の教師の言葉として、「ある宗教団体の教祖は、父親が、下駄を履いて行け。母親が、草履を履いて行け。と言われた。その教祖は下駄と草履を履いていった。この様な自主性の無い子が育ったから、日本が戦争に負けたんだ。」と言うんです。もうえらい迷惑です。一五も一六にもなった人間が、「父親が下駄を履いて行け、母親が草履を履いて行け。」と言ってそうしたのなら、大変ですけど、そうじゃない、本当に幼い子供が、両親の言う事は絶対だ。と、信じ切る。その姿を、尊い。と言うんです。これは、教祖の逸話の問題として捉えるんじゃない、私達の今日の問題として、捉えなければ成らない。と思うんです。私達は果たして、それだけ両親を素直に信じておったか、両親に仕えていたか。果たして、子

供たちからそれだけ信じられておるか。黒住教の教師、という立場。黒住教の学院院长。という立場で信者さんから、又生徒から、それだけ信じられておるかどうか。と、言ったら、まだまだ恥ずかしい面が在ろうか、と思うんです。それよりもっと私達自身が、神様は生きて働いて下さっておる。と、言われた教えを。教祖の教えを信じて行けば絶対だ。という事を、果たして教祖の様に、素直に信じて仕えているかどうか。これは、私達自身の信仰の問題だ。と思うんです。とにかく教祖は、徹底的に親を信じていった。と言うんです。その教祖が段々長ずるにあたりまして、そういう、親を信じて行く事が、更に、本当に親に喜んで頂ける孝行するにはどうすればいいか。それを考えました。十有五歳の頃、元服の頃、世の人に仰ぎ尊ばれる、生きながら神になろう。と、恐らくその時、教祖が神になろう。と、大きな志を抱いた訳ですが、恐らくその神とは具体的なものではなく、漠然としながらも、神様の様な人になれればいい。と、その様な気持ちでなかったか。と思うんです。ですから、教祖の青春期は、ひたすら求め、求め抜いて、生きながら神になるにはどうすればいいか。

神とは何か。これが大きな問題でありました。誰に尋ねても、真面目に尋ねる教祖に対して、答えをして来る者はありませんでした。本も漁ったそうです。中々判らなかつた。自ら求め求めてやっと、二十歳ばかりの頃、一つの悟りを開いたそうです。その悟りとは、心に感じて悪い。と思う事は絶対に行わない様にしよう。そう固く決めたそうです。非常に強い意志を以て、それに努めたそうです。心にとつて悪い事、とはどういう事か。具体的に五つ、書きあげました。人の物を取るな、人を殺すな。こんなものはいつておりません。言うならば、それは、人の人たる道としても、駄目な道であります。ですから教祖が、神になる道として求めた五つ。というのは、「信心の家に生まれて信心の無い事は、悪い事である。神職としての神様にお努めする人間が、信仰心がない。というのは、以ての他である。それから、己が慢心にて人を見下す事は、悪い事である。人の悪を見て心に悪心を抱く事は、悪い事である。無病の時家業を怠る事は、悪い事である。誠の道に入りながら心に誠が無い事が、神の心で神になろう。と、努めた訳なんです。ところが、御歳三十三歳の端時で

す。一八二二年の事です。岡山地方に流行病がおこりました。今で言う赤痢チフスの類ですが。母親が、激しい下痢と高熱で、亡くなってしまった訳です。教祖は泣きながら、葬式を出したそうです。で、ほっとした。思うたら、今度は父親が、同じ症状を訴えたそうです。一週間以内に両親を亡くしたそうです。教祖は尋常では考えられないくらい、泣き続けたそうです。お墓で泣き続けて、気絶した事もあったそうです。世に親思い、親孝行の人は沢山あるけれど、黒住教の教祖程、親の事を思い、慕い続けた人は、いない。と、言われるそうですけど、其ほど、尋常では考えられない程、嘆き、泣き続けたそうです。他の物が、目に入らない程なんです。大事な大事な両親を失うと共に、今迄の厳しい迄の修行が全て打ち消され、生き甲斐も、生きる喜びも、全て無くした訳なんです。で、悶々としているうちに、生きる力が在りませんから、病気に罹りました。精神と体の事が、最近よく言われますけれども、心が侵されましたから、体にも顕れました。当時、死に到る病と恐れられていました結核に罹りました。もう、段々悪くなり、一年後には床に付き、三か月後に

は、医者に匙を投げられました。恐らく本人も、覚悟を決めたんじゃないか。と、思います。先程も話した様に、寝転んで神様の名前を唱えるだけでも出来なかつた教祖ですから、文化一四年、一八一四年の正月の一九日には、家族の者に頼んで、布団ごと縁側に出してもらって、最後のお日の出を拝んだそうです。恐らく教祖自身、覚悟を決めて、死を待たないか。と思います。静かに死を待っている時に、ふっと思ったのが、お日様の温もりの中に、幼い頃、両親共々にお祈りしたお日様の中に、両親の姿が拝めたんじゃないか。と、思います。『今まさに、志半ばに亡くなるうとする自分を両親が見て、なんとお思いになられるだろうか。』その時教祖は、激しいショックを受けた。言うんです。考え様に困っては、親の事を、亡くなるまで思い、慕い続けたのは、親孝行の様には、思えるんですが、親の目から見ますと、目に入れても痛く無い程、可愛がって来た我が子が、自分たちの事を慕うてくれるのは嬉しいんだけど、それが為に、命を縮めているという。喜ぶ親はいない。教祖は思わず知らず、とんでもない親不幸をして来たんだ、と。せめて一息ある間で

教祖は、生前中黒住教の事を『おみち』と読んでおりました。「お道」と言っの
は何か。と言いますと、『天照大御神様
の御徳の道である。御徳の顯れた道であ
る。そして、人の生きる道である。』と、
言うんです。だから、教祖は信者を、
『お道連れ』と呼んでおられます。その
「道連れ」と言っのは、「旅は道連れ世
は情け」の『道連れ』であります。共に、
大御神様の御徳の道を歩まして頂き、大
御神様のお膝元まで歩まして頂こうじゃ
ないか、一緒に手を携えて歩こうじゃな
いか、と。これが、黒住教の基本理念で
あります。ですから、言うならば、全て
の人が大御神様の御徳に目覚めて行って、
共に歩かして頂こう。それが、お道連れ
である。と、言うんです。黒住教の教え
の元、と言いますのはどういう事かとい
いますと、教祖の教えから言ひまして、
私達人間は、全ての物を生かし育んで下
さる大御神様から、『分霊(わけみたま)
〔黒住教では「御分心(ごぶんしん)〕
と呼んでおられます。〕「命」と置き換え
てもいいんじゃないか。と思います。現
代風に言うならば、生きる力、生命力、
とでも言いましょうか。』命を頂いてお
る神の子である。罪の子でも、汚れの子

でも、悪因縁を背負った者でもない。尊
い神の子である。この、神の子として生
まれた人間が、人生という道場に於いて、
人の人たる道を生ききって、やがて形を
脱ぐ時に、八百万の神の一柱と。これが
黒住教の人間観であり、神様観でありま
す。神の子として産まれた人間がどの様
にして神に成れるか。と言いますと、神
の心で神の行いをすれば神になれる』と、
教えられておられます。で、神の心とい
うのは何か言いますと、先程言いました五
カ条に加えて、『腹を立て物を苦に
する事、ありがたき事を取り外す事』こ
れは恐ろしい事だ。という教えを加えて
黒住教では『七カ条の教え』として示さ
れておられます。『そういう神の心で神の
行いをすれば間違いない神になれるんだ。』
ところが、御分心を頂いた、神の子とし
て生まれた人間でも、鬼の心で鬼の修行
をすれば、鬼になるぞ。と。それから、
蛇の心で蛇の行いをすれば、蛇になるぞ。
と。仏の心で仏の修行をすれば、仏にも
なれるぞ。と。そう教えられた訳です。
黒住教ではいろんな日々の修行がありま
すが、特に一番大切な修行とするのは全
ての物をありがたく頂いて行く修行。全
ての物に神様のお働きを見、それを祈り、

手を合わせ、それに感謝し、ありがたく
頂いて行くのを最高の修行としておりま
す。で、もうひとつ行性的には、教祖の手
振りに倣いましてお日の出を拝みます。
お日の出にこそ、その全ての物を生かし
育てて下さる大御神様のお働きが一番顯
れている様な気が、毎日努めております
とそういう気にさせて頂きますし、この
お日の出を拝んで行くならば、教祖に近
い、教祖が歩まれたレールの上を乗って
行けるんじゃないかという様な気持ち
強くします。それと共に、心を敬う為に、
黒住教では、『お敬い』と言ひまして、
中臣の敬いを何本も何本もあげる修行を
しております。これを『お敬い修行』と
言ひます。『お敬い修行』というの
ういったもので、お敬いの意味を詮索す
るといふ事は余りしませんが、とにかく、
一本でも多くお敬いを上げれば教祖に近
付く事が出来るんだ。教祖は生前、何本
も何本も中臣の敬いを上げ続けられまし
た。ですから私達も、そのお敬いを上げ
る事を一つの修行としております。もう
一つは黒住教独特の修行の一つでありま
すが、教祖は先程お話ししました様に、
昇るお日様が迫って来る、その日をゴクッ
とのみこんだ。と、言われるんです。そ

れに倣いまして、『御陽気修行』と称し
まして、まあ、俗に言う鎮魂の行とかそ
ういうふうな行は、肺に空気を入れるん
ですけど、我々が「御陽気修行」と呼ん
でいるものは、お日様に向かって日を飲
み込む。言うならば、空気を飲み込む訳
ですけれども、形の上ではそうなるん
です。肺に入れるんじゃあなしに胃に入れ
るんです。腸に入れるんです。一種独特
の、慣ればすぐ出来るんですけど、ゴ
クッと水を飲むが如くその陽気を飲み込
むんです。で、陽気を頂いて下腹に収め、
天地と共に気を養うのが黒住教で言う
「御陽気修行」なんです。まあ、中々慣
れないですけど、慣れていきますと、精
神的に強い物が出来る様に思います。ま
たそれに因って病氣から立ち直った人も
居りますし、心身共にリフレッシュして、
元氣になっていっております。良く先輩
から言われるんですが、現在は空気が汚
い様な時代になったからかもしれないけ
れど、とにかく御陽気修行をする人が、
数が少なくなりました。と言う事を指摘さ
れます。一日に千回頂くといかなる難病も
完治する。と言うぐらひ昔は言われたら
しいです。で、我々はすぐ計算しますか

ら、一日千回言いますと何秒に一回しなればならないんだ。と言う事を教えられる事でありませう。それからもうひとつは、とにかく宗教的、まあ黒住教の体質なんかもそういう事もあるんですが、自らを清め、修行に依って自らを高めようとする働きがあくまでも中心でありましたが、教祖は非常に謙譲の人でありました。しかし、人の為にはトコトン尽くされる人でありました。今私達が一つの課題としておるのは、私達が教祖の教えを、今言いました七つの教えを学んで、自分を厳しく律して努めて行く。という生き方も大事だが、それと同時に教祖が努めた道を、もっともっと学んで行こう。追体験して行こう。という事から、教祖がどの様な生き方をされたか、言うならば人の為に誠を尽くされ、人の為に尽くし尽くされた生き方を学んで行こうではないか。これが新しい今日の我々の課題である。と。どういう事を具体的に言うか。と言いますと、『人の為に温かい手を差し延べ、人の為に祈ろうではないか。』と。我々教師ならば人の為に祈るのは当たり前ですけれど、信者の段階で、お道連れの間で。どちらかというと、お蔭を取り次ぐのは教師、お蔭を受けるのは

信者、という体質を。御縁のある人は皆人の幸せを祈ろうじゃないか、人の幸せの為に努めようじゃないか。それが教祖の心を判る一番の道ではないか。という事で今、その新しい動きを展開しつつあるところでもあります。実際問題、私がある時に大阪へ行きました時に、金光教の大きい教会所が在るんですが、そこで宗教者の会議がありました。そこへ行く途中に、たまたまなんですけど、場所を聞くとこの意味もあつたし少し時間も早かったので、喫茶店で時間を潰してそのマスターに場所を聞いたんです。マスターに、「貴方は金光さんですか。」と聞かれましたから、「いいえ、今日宗教者の会議があつて、私は黒住です。」と言いました。「それなら黒住教は今何をしますか。」と聞かれました。「はい、拝んどります。」と言ったら答えにならないので、「実は、黒住教は教祖の教えに従いまして、人の為に祈り、人の為に尽くす。こういう事を訴えているとこだ。と。で一つの現れとして重症心身障害児の施設を造る為に運動を興し、そして、その施設に収容されておる重度の心身障害児で、目が見えなくても大変、手足が動かなくても大変。それが四重も

五重も重なって、本当に可愛そうな子供達がある訳です。そういう子供達に手を差し延べその子供達が安心して住める、安心していける様に施設に入って頂き、その人達の為に何かさせて頂くのではなにか。という運動を興し、中四国で初めての施設を岡山に造るのに奉仕させて頂きました。以来婦人会は、毎週そこに行っておしめたたみ。一日に一万枚位要る、おしめたたみを奉仕しております。いろんなボランティアの方が行って奉仕されておりますが、そういう事をし、更にはその施設が大きくなりまして、『旭川荘』というのは日本一。と言うより、アジアになりました。で、その様に非常に御縁がある事ですから、今度は東南アジアの各施設、韓国の『李 方子』妃殿下が造られた『明輝園』とか『慈恵学校』の施設で働く方々、又、タイの施設で働く方々等をお迎えして。その往復の費用を持たして頂いて、そしてそこで、福祉の勉強をしてノウハウを学んで頂いて、それぞれの国に帰って恵まれない子供達に尽くして頂く。言うならばそれを新聞社の人が、『福祉外交』と、呼んでくれました。そういう様な事を、少しずつでもやっておるんだ。」と、言いましたら、

「頑張ってください。」と、見ず知らずの喫茶店のマスターから讃えられました。私はある意味で「頑張ってください」と言われた中に、一般の人達はやはりそうした動きを、教祖の教え、それぞれの教えは立派なのだけど、宗教が、やっぱり人の為に、役立ってくれ、世の為にあってくれ、国の為に尊い働きをしてくれ。という事を、皆さんが望んでいるんじゃないか。と、改めて教えられた気が致しました。ですから私達の『今日の現状と課題』言いますか、まだまだ教祖の心を充分理解してないし、教祖の心を充分具体化してないのは本当に恥じ入るばかりですけれど、少しでも、教祖の心を心として世のお役にたてる様な、教祖の願いをそのままに努めて行く事が、私達の課題ではないか。そういう事を強く思い、それを強力に押し勧めて行こう。と、今している所であります。

丁度時間が来ましたので、長時間に渡って誠に御静聴ありがとうございました。

(拍手)

司会
「黒住先生、大変ありがとうございます。」